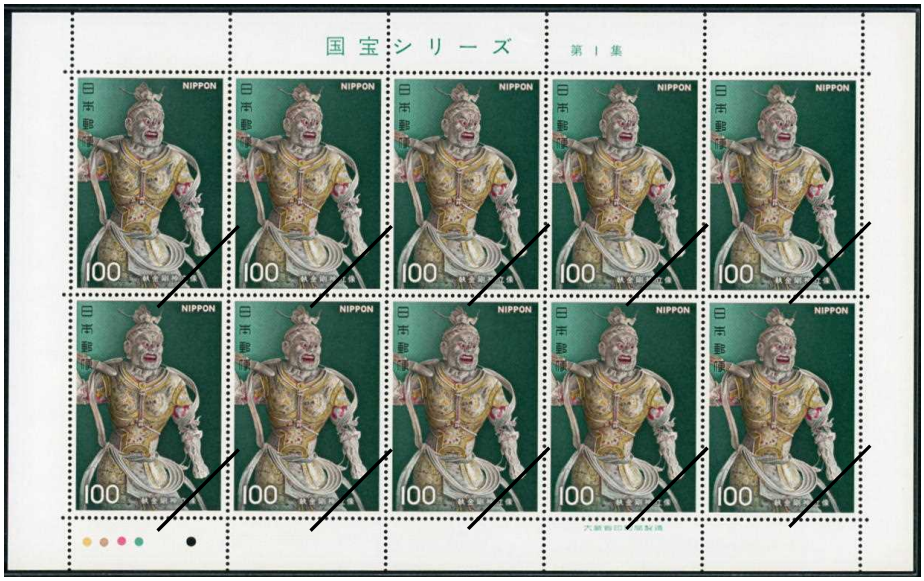
（５月例会「コレクション紹介」より）

第 2 次国宝シリーズ第 1 集 100 円のシート

永吉 秀夫

昭和51年から53年にかけて発行された第2次国宝シリーズのうち最初の第1集100円「執金剛神立像」のシートをご覧に入れますが、このシート何か変だと思いませんか？　それは上耳紙に印刷された記念文字(題字)を目打が貫通している点。こういう切手は、日本切手では他に例がないのでは？(もし他にこういう例を見つけたら、こっそり教えて下さい)



昭和30年代前半まで、多くの記念切手のシートは上耳紙に題字がありました。目打は櫛型で、左、右、または下耳紙に貫通しています。文化人切手など題字のない切手の場合は上耳に貫通することもありましたが、製造上の都合によって題字のある切手のシートを上下方向に穿孔する場合は、櫛の向きを下向きにして題字貫通を避けました(題字を左または右耳紙に移した例もごく少数あり)。

記念切手の題字は、昭和35年「議会70年」のときの事件(発行日が急遽延期されたため、発行日が印刷されていた上耳紙を題字ごと切断して発売)をきっかけに廃止されてしまいました。一方記念切手の目打は、昭和36年以降、上下両側または左右両側に貫通する連続櫛型目打が主流になっていきますが、すでに題字が廃止されていたため上耳にも気兼ねなく貫通させることができました。

その後、昭和50年の文通週間切手のときに題字が復活しましたが、以降目打を上耳に貫通させる必要がある場合は、題字を左耳に移すことになりました。昭和51年発行の第2次国宝シリーズ第1集でも、低額50円の20面シートでは実際そうなっていますが、高額100円では題字を上耳に置いたまま目打を上耳に貫通させてしまったわけです。たぶん**印刷局の失態**なのですが、こういう失態は二度と繰り返されることがありませんでした。

なおこの第2次国宝シリーズ100円はすべて同サイズの10面シートですが、製造上の都合で目打が上写真の第1集とは違ってシートの長手方向に穿孔され、左右貫通(第5集以降の横長切手では上下貫通)となっているものもあり、シートを並べてみるとバラエティが楽しめます。また趣味週間切手「ビードロ」以来親しまれてきたこの切手サイズは、本シリーズでの採用が最後となりました。